令和２年度　教育研究所　研究発表会　所長挨拶
11 月 28 日 信濃教育会館

おはようございます。新型コロナウイルスの感染が第三波の状況で拡大しつつあります。皆さんは安全第一でソーシャルディスタンスを保ち、三蜜を避けることを常に念頭に置かれていると思います。その安全第一という関わり方は、新型コロナウイルスというウイルスに対する関わりであって、人と関わることではないんですね。そのことが混同されて、人との関わりがソーシャルディスタンス、三蜜を避けるというような思いになってしまうことを私は恐れるわけです。

そのことを強く痛感したのは今年の 10 月に出た、伊藤亜紗さんという人が書いた『手の倫理』という本です。その中心テーマは「ふれること」と「さわること」の違いなんです。「さわる」というのは対象を物として扱う接しかたなんです。物に手を接触させることが「さわる」なんです。しかし、「ふれる」は本来、人間に関わるとき、あるいは例えば大切な骨董品でも非常に素晴らしい物に触れる時は、それはさわっているのではなく、その物の背後にある、その物の奥にある魂とか作り手の思いに心を寄せて、本当にそこに関与しようとして関わるのが「ふれる」なんですね。人間に関わるときはまさにそれが本来なんです。そのことを伊藤さんは、実はヘルダー（Johan Gottfried von Herder, 1744-1803）という古いドイツの哲学者の思想をもとに語るのですが、「さわる」というときは距離はゼロが一番近くなる（直接ですから）。ところが「ふれる」というとき、接触距離はマイナスになると言うんですよ。マイナスになるとは、つまり、触れている対象の奥にあるものの世界に入り込むこと。これが「ふれる」ということだと言うんです。そして入り込むときは当然「入っていいかね」というこちらの問いかけと、そして「入っていいよ」という許しを得ているという確信、それは信頼というものなんですね、それがあるというのです。入られたら困るということもあり得るけれど、あえて危険性も引き受けて受け入れてもらう。ここでは先方（相手）がこちらを信頼しているのですが、こちらも、こちらが相手の心の奥に入り込むことで相手は傷つくかもしれない、それで怒り出すかもしれない。相手はそれを乗り越えて、私を信頼してもらうしかない。つまり、「ふれる」は互いの信頼が成り立っていなければ生まれないと伊藤さんは言っているんですね。そのことはヘルダーは「彫塑論」という塑像づくりについての論文で語っているのです。彫塑というのは彫刻家が粘土でこれから作るものの形（塑像）を練り上げて作っていくことですが、その彫塑という営みについて、ヘルダーは「粘土にふれる」ことの意味を考えるのです。彫刻家は、粘土に触れながらこれから作られていくものの思い、魂、どうなろうとしているかを感じとりながら触れていく、これが彫塑ということだと言うんですね。それが「ふれる」ということの原点だと。それは別に直接、物理的に接触するかしないかということではなく、話しかけたり、微笑みかけたりするのも「ふれる」です。そこには双方の信頼というものがあるというわけです。そして、私がよく語る話ですが、山岸俊男さんと

いう社会学者が信頼と安心は完全に反対のことだ、日本は安心社会を目指しているがそれはまちがいだと（山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』中公新書、1999 年）。そして信頼というのは、もしかして相手が傷つくかもしれない、自分も傷つくかもしれない、という不安を乗り越えて、お互いが相手を信頼して関わる（関わり合う）ということなんですね。信頼というのは安全安心ではない、むしろその逆だと言うんです。まさにそれはマイナスの距離をもって接すること、それが信頼だということです。

ある看護師さんが患者さんの胸にぶら下がっていた器機が外れそうになっていたので相手の目も見ずに手でさわったら足を蹴られたというんですね。その看護師さんは患者さんが退院するときの申し送りの中に「この患者さんは暴力をふるう危険がある」と書いたそうです。それを伊藤亜紗さんは、本当は看護師さんが相手の胸に触れるときに、まさに「ふれる」という思いで関わるべきところを「さわる」という形でやった。これは相手に対して非常に失礼なことで、相手が怒って蹴った。それは私たち人間と関わるときに「関わっていいかね」という思いで関わり、相手もそれを受け入れてくれる。そのことを信頼する、信頼というのは、「もしかしたら違うかもしれないけれどお願いね」という思いで関わる信頼なんです。そういうことは人と人との関係ではものすごく大事なことなんです。そして関わるときに、自分が信頼されているかということも関係してくる。と同時に、自分は本当に相手を信頼しているかということ。安全安心を目指すことの正反対だということですね。それが通じるんですね、距離が離れていても。

今大学の先生をしている私の教え子の女性は、電車やバスに乗った時にむずかっている赤ちゃん、一歳から三歳、場合によっては四、五歳ですね、そういう赤ちゃんを見たときににっこり笑いかけるそうです。マスクしているからこちらは目だけです。でも、自分がマスクの中からにっこり笑いかけると微笑み返しをしてピタッと泣き止んでこちらの目をじっと見るんです。彼女は何ヵ月もずっと実験しているというんです。それで相手が微笑み返ししてくれなかったことはほとんどない、９割方の赤ちゃんはこちらの目だけしか見えていないのにもかかわらず微笑み返しをする。赤ちゃんの方はマスクをしていませんからすぐにわかる。すごいですね。赤ちゃんは「この人は信頼に値する人、またこの人は私のことを信頼してくれているなんだということを、マスクの上にだされた目だけでぱっと分かるんですね。そしてそれに微笑み返しする。

こういうことが今失われていますよね。でも、本当にマスクがあるから見えない、表情がわからないとかよくいいますけど、確かにそうですけど、でも思いは伝わります。絶対に伝わります。ですから、本当にマイナスの距離で接してもらいたいということです。そのことをぜひ今日の発表の中で、先生方が子どもたちにマイナスの距離で接しているかどうか、そのときに信頼ということ、相手は私を信頼してくれているか、私は本当に子どものことを信頼しているか、信頼ということをちゃんと守っているかということを発表の中で見ていただきたい。また、発表されている方に対しても信頼とそしてマイナスの距離で接していただきたい。発表している方の思いを引き受け、それを尊いものとして、そ

れはマイナスの距離をもつということは、どうしても相手の中に入っても分からないことってあるんです。むしろ分からないことと出会うのが当たり前なんです。そのことについて鷲田清一さんという大阪大学の総長をされた方は、尊厳と畏怖の念をもって異質な物と出会う、それのことが、「ふれる」ということの奥に「さわる」があるけど、その「さわる」は「尊厳と畏怖の念をもって受け止める」ということなのだというのです。子どものわからなさに接したときに、その子について「わからない」ってこと、それは大切なことなんだという思いで「わからなさ」と出会うこと、これが本当のマイナスの距離での「ふれる」ということです。これを今日の発表の中で確かめて、またご自分自身のそういう「ふれる思い」で発表を聞いていただければと思います。今日はよろしくお願いします。